乙貞（おとさだ）

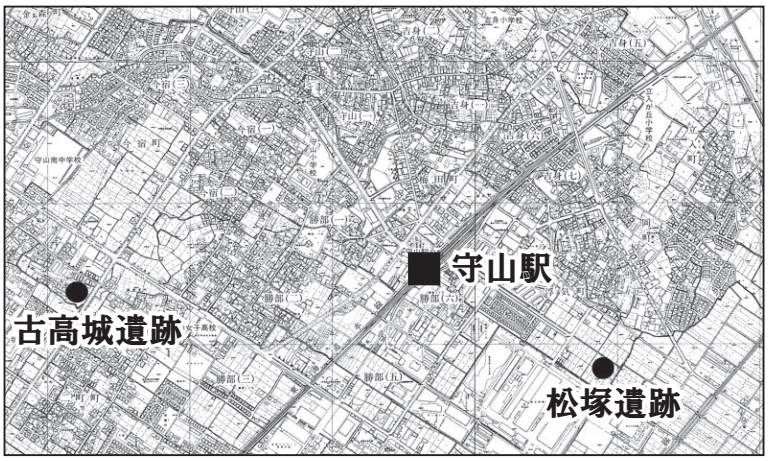
第１８０号　　通巻３１巻　　第５号
平成２４（２０１２）年　１月３０日　発行

守山市立埋蔵文化財センター
TEL/FAX　０７７－５８５－４３９７

〒５２４－０２１２
守山市服部町２２５０番地

年が明けるとともに、雪がちらちらと舞いはじめ、季節はいよいよ本格的に冬の様子をみせはじめてきました。今年も、埋蔵文化財センターは、市内の文化財ニュースを余すことなく、皆様にお届けしたいと思っております。

さて、今号の乙貞では、前号で中間成果を報告した、平安時代の建物跡を発見した古高城遺跡と、12 月に調査を完了し、古墳の存在を明らかにした松塚遺跡の調査成果について紹介したいと思います。



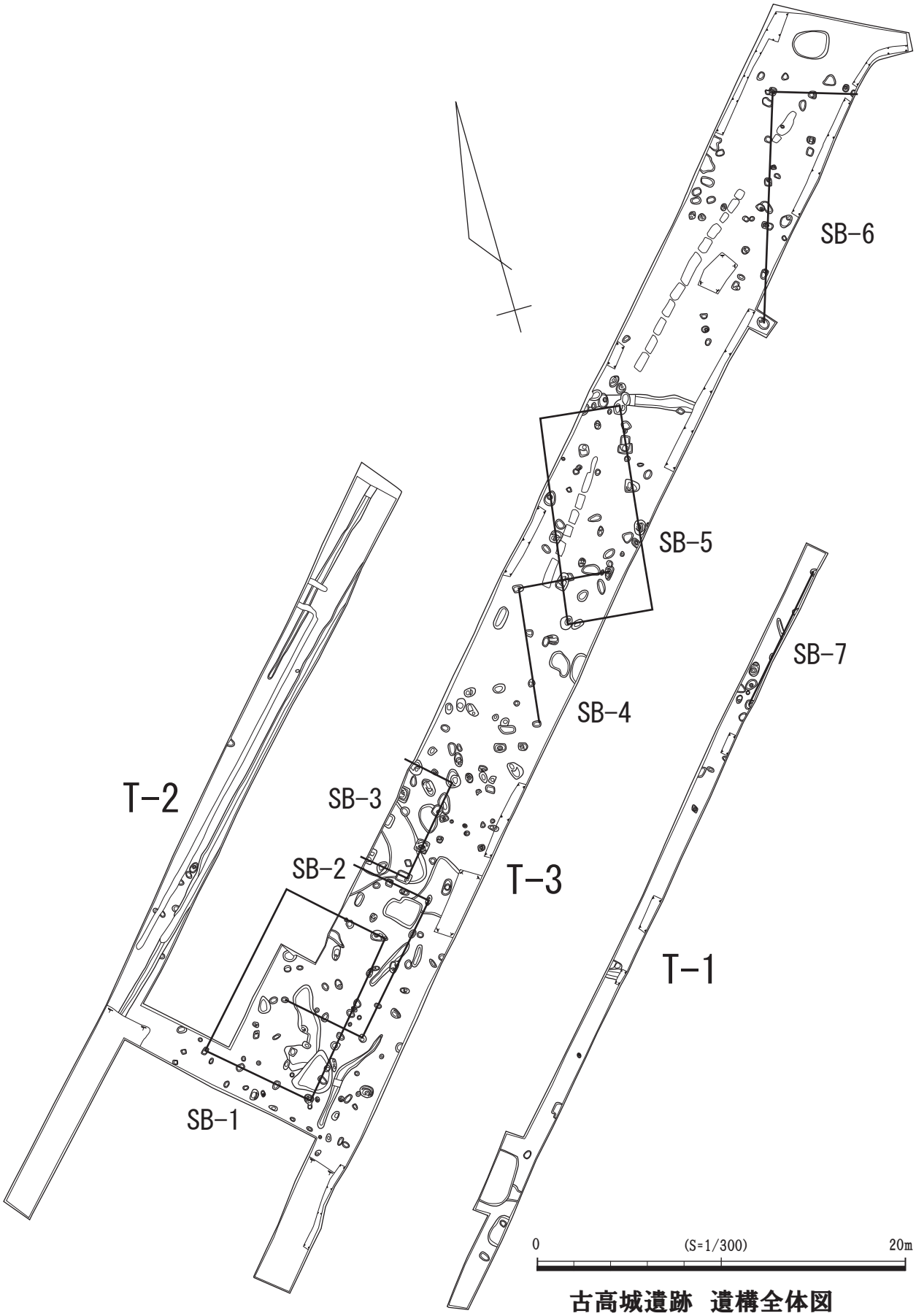
● 発掘調査成果 ●

（1）古高城遺跡（ふるたかじょう）第 15 次調査

焔魔堂町字円前地先において、平成 23 年 10 月から実施した調査は、11 月 29 日をもって完了しました。

調査の結果、10 世紀後葉から 11 世紀を中心とする掘立柱建物群（ほったてばしらたてもの）で構成された集落跡であることが判明しました。掘立柱建物は、SB―１～７の計７棟を確認できました。出土した遺物から、これらはおおよそ同時期のものと考えられます。掘立柱建物群は、その建物の主軸方向から、東へ約 40 度を指向する SB―１～３、７のグループ１と、ほぼ北を指向する SB―４～６のグループ２に分類することができます。グループ１では、SB―１と２がほぼ重なる状態で見つかっていることから、主軸方向を揃えて、

Ｔ－３　掘立柱建物SB－１～３



古高城遺跡　遺構全体図

建物を建て替えたことが推測されます。最も大きな建物は、SB―１で、５間×３間で、床面積は約 63 ㎡の規模になります。グループ２では、SB―４と５が重なるように見つかり、ここでも向きを揃えて建物を建て替えたことがうかがえます。最も規模の大きなものは、SB―６で、５間以上×２間以上、床面積は約 58 ㎡となります。

市内では、飛鳥時代から奈良時代にかけての建物の主軸方向は、北を指向することが多いという傾向があります。ところが奈良時代の後期から平安時代になると、条里（じょうり）制（せい）と呼ばれる新たな地割制度が施行されることになり、従来までの建物の主軸方向に変化がみられるようになります。

今回の調査成果は、掘立柱建物の主軸方向という着眼点から、古代の土地利用の変遷をたどることができる貴重な成果であるといえるでしょう。（木下）

Ｔ－３　掘立柱建物SB－４、５

Ｔ－３　掘立柱建物SB－６

（2）松塚（まつづか）遺跡第2次調査

浮気町地先において、平成 23 年 11 月 28 日から 12 月 28 日にかけて、宅地造成工事に伴い、約 650 ㎡を対象に発掘調査を実施しました。調査は、調査区をトレンチ１～５の５つに区分して実施し、そこから竪穴建物や古墳、ピットなどが見つかりました。

竪穴建物（たてあなたてもの）SH―１は、トレンチ５で確認できました。長軸 5.2 ｍ×短軸５ｍで、床面積は約 26 ㎡を測り、方形を呈するものです。出土遺物が少なく詳細な時期はわかりませんが、以前、近隣で実施した調査で見つかっている竪穴建物が古墳時代のものであることから、今回見つかったものも同時期の建物跡と推測されます。

トレンチ５　竪穴建物SH－１

トレンチ２では、古墳の周溝と考えられる SD―４を検出しました。幅約 2.5 ｍ、深さ約 0.5 ｍを測り、この溝は方形に周ると推測されることから、一辺 20 ｍ前後の方墳に伴う周溝の可能性があります。また、SD―４の東より（古墳の墳丘側）から西より（古

墳の外側）に向かって、遺構検出面から約0.2ｍの深さで大量の川原石が見つかりました。この川原石は、溝の床面から浮いた高さで確認できたことから、古墳の墳丘斜面に葺(ふ)かれていた石が転落したものと考えられます。さらにこの川原石とともに、多数の埴輪が出土しました。これらの埴輪は、古墳の墳丘上に置かれていたものが、川原石と同様に転落したものと推測されます。出土した埴輪の種類には、円筒埴輪(えんとうはにわ)、大刀形埴輪(たちがたはにわ)、甲冑形埴輪(かっちゅうがたはにわ)や、その他形象埴輪(けいしょうはにわ)などがあり、この古墳は５世紀後葉に築造されたと考えられます。

今回出土した埴輪の中で最も注目されるのが、大刀形埴輪と甲冑形埴輪です。大刀形埴輪は、当時の刀を模したものと考えられており、今回の調査で出土したものは、刀の柄にあたる部分がほぼ完形で出土しています。柄頭(つかがしら)から柄縁(つかぶち)にかけてあった革紐のようなものも模倣しています。この大刀形埴輪は、市内で初めての事例で、県内では、米原市（旧近江町）の狐塚(きつねづか)５号墳に次いで２例目となります。全国的にみると、この種の埴輪は６世紀代に属する事例が大半で、５世紀代の出土は少ない傾向にあります。甲冑形埴輪は、冑の錏(しころ)や竪矧板(たてはぎいた)、腰巻(こしまき)にあたる部分が出土しました。

トレンチ２の近辺では、昭和57年に行われた自転車道と水路改修工事の際に、円筒埴輪や甲冑形埴輪などが出土しており、この調査で出土した甲冑形埴輪と、今回の調査で出土したものは、胎土や線刻などが類似していることから、同一の埴輪であると考えられます。

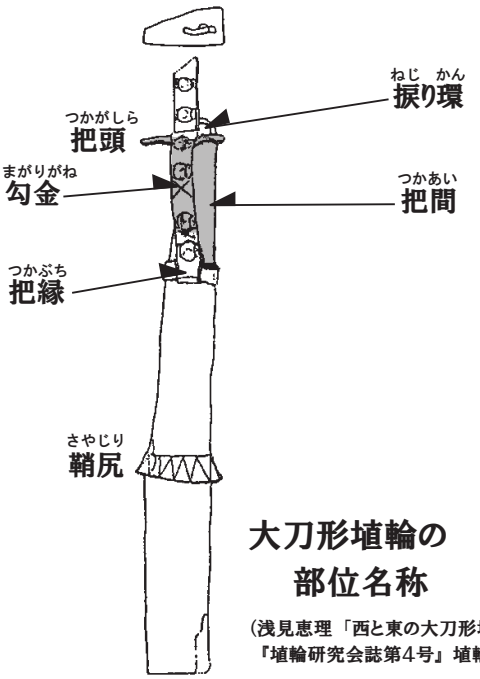
これまでの調査の中で、近辺に古墳が存在することは推定されていましたが、今回の調査によって、その存在が明らかになりました。調査地近辺では、平成17年に松塚遺跡第１次調査において、古墳が確認され

トレンチ２　SD－４　川原石検出状況

トレンチ２　SD－４　大刀形埴輪出土状況

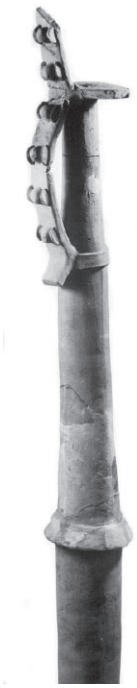
昭和57年度出土　甲冑形埴輪

ています。さらに、平成22年度には、個人住宅建築の際に古墳の存在が明らかになっています。今回確認された古墳も含めて、この周辺一帯には5世紀後葉から6世紀初頭にかけて築造された古墳群が広がっていたものと考えられます。調査地の周辺には、古墳時代の集落跡である吉身南(よしみみなみ)遺跡や、栗東市の亀塚(かめづか)古墳、玉製品の工房などが見られる辻(つじ)遺跡などが所在しています。今回の調査成果は、この地域の古墳時代や古墳文化を考える上で、非常に重要なものであるといえるでしょう。(平井)



大刀形埴輪の部位名称

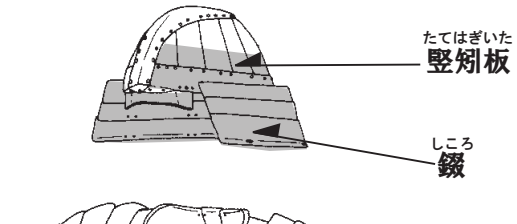
(浅見恵理「西と東の大刀形埴輪」『埴輪研究会誌第4号』埴輪研究会 2000年)

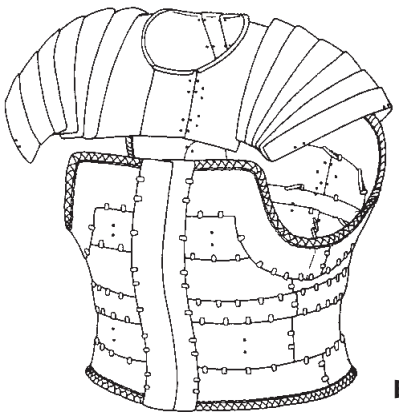


大刀形埴輪　6世紀前半
(群馬県塚廻(つかまわ)り四号墳)

(高橋克壽『歴史発掘⑨埴輪の世紀』1996年)

※網掛け＝出土した部位



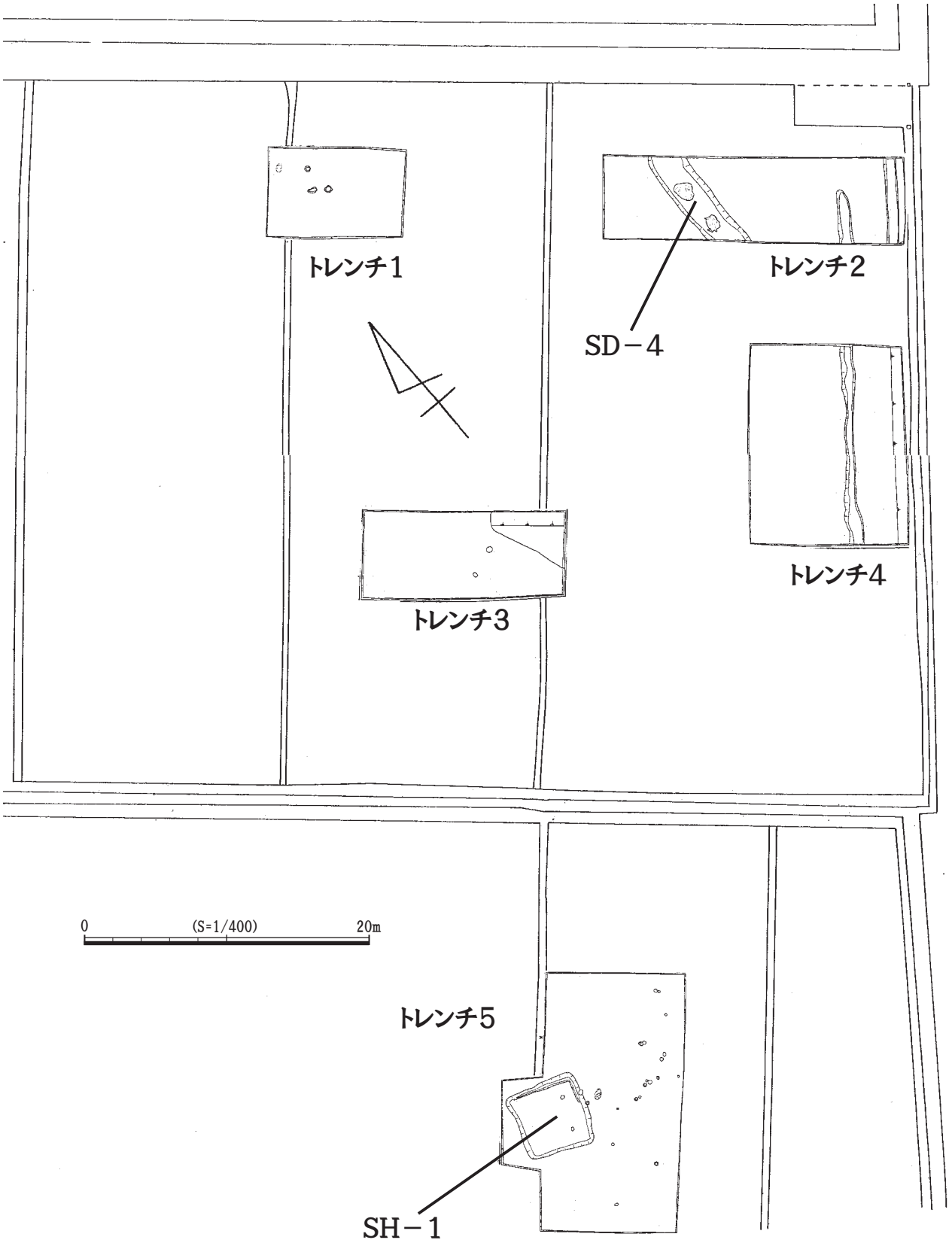


甲冑模式図

(兵庫県立考古博物館『茶すり山古墳 - 巨大円墳に眠る但馬の王 -』2010年)

甲冑形埴輪
5世紀中頃
(大阪府土室(はむろ)遺跡)

(高橋克壽『歴史発掘⑨埴輪の世紀』1996年)



松塚遺跡　全体図